

周山廃寺の発掘調査 —京北唯一の古代寺院—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真 1 現地説明会風景 (北東から)

はじめに 周山廃寺は、白鳳期(7世紀後半)に建立された京北地域で、現在のところ唯一の古代寺院跡です。京都市街地中心部から北西に約25km離れており、2018年4月から8月にかけて、京北地域小中一貫教育施設整備に伴って発掘調査を実施しました。

周山廃寺は、^{ゆげ}弓削川と桂川の合流点、山背(京都)―若狭、丹波―^{つな}近江を繋ぐ街道が交差する^{ようしやう}要衝に立地しています。旧丹波国の中心地であった亀岡から離れたこの地で、寺院が造営された背景の一つとして、在地の人々のみならず、

水陸の交通路を通じて往き来する人々への意識があったと考えられます。

周山廃寺の発掘経緯 周山廃寺は、1947・1949年に初めて緊急発掘が行なわれました。太平洋戦争中に収蔵品の疎開に伴って当地を訪れていた東京帝室国立博物館(現・東京国立博物館)の石田茂作氏が、終戦後、新制中学校(現・市立周山中学校)建設工事によって、この寺跡が破壊されることを危惧され、地元有志とともに行なったものです。当時の調査では、丘陵裾部で東堂(講堂)・塔・中堂(金

堂)を、さらに西の1段高いところで西堂が確認されました。このうち東堂・塔・中堂は、京都府指定史跡として保存整備され、現在も



図 1 周山廃寺の位置

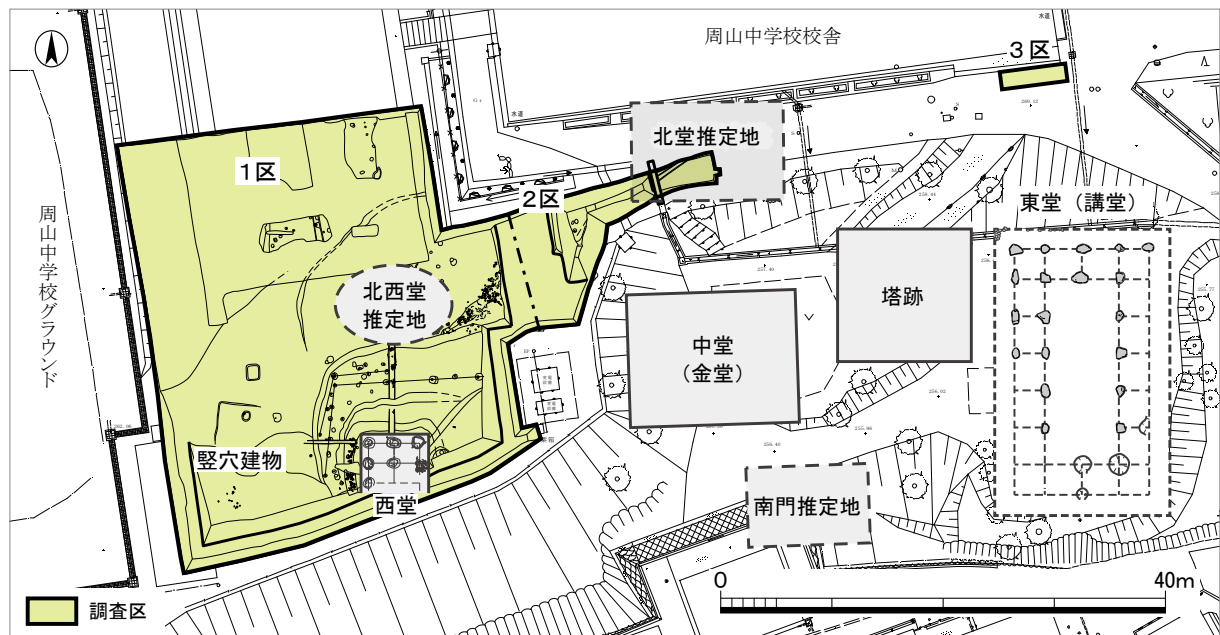


図2 調査区と周山廃寺伽藍配置図

見ることができます。ただし、西堂は建設工事によって失われたと考えられてきました。

西堂跡の再検出と新たな発見

ところが、今回の発掘調査により、西堂が地中に残っていたことが明らかになりました。1949年の発掘で見つかった6基の礎石を再検出した結果、東西4.2m×南北3.6m以上の小型の礎石建物であったことが分かりました。また、建物周辺に排水溝が巡ることも分かりました。礎石の大きさや配置、寺跡全体の位置から、経蔵や宝蔵の可

能性が考えられます。

また、西堂北側のさらに一段高いところで、新たに平坦面が見つかり、その周辺から多量の瓦が出土しました。こうした出土状況から、西堂の北側に更にもう一つの瓦葺建物が存在したことが推定されます。石田氏は塔以外の堂跡の性格を特定することを避け、相対的な位置関係から堂跡の名称を付けましたが、それに従うと「北西堂」と名付けられるでしょう。

さらに今回の発掘調査では、西堂跡の西側で竪穴建物を1基検出

しました。この辺りは高梨遺跡として知られており、2001年度に京都府京北町教育委員会により現在の周山中学校のグラウンド造成に伴って発掘調査が行なわれました。それによると、高梨遺跡では計7基の竪穴建物が見つかりましたが、そこから焼土・鍛冶滓^{かじさい}や鉄製品などが発見されました。周山廃寺の造寺に関わる工房跡があった可能性があります。

まとめ 周山廃寺は戦後、緊急発掘されて以来、その立地や伽藍配置から注目されてきました。7世紀後半に創建された地方寺院は数多くありますが、周山廃寺のように比較的狭い範囲に堂塔が密集している例は少ないからです。とりわけ、寺と瓦窯（周山瓦窯跡）、工房（高梨遺跡）がセットで確認された例は稀であり、地方寺院における造寺・運営などを知る手掛かりとしての資料的価値は高いです。今回の調査成果によって、周山廃寺の具体的な姿がより明らかになるといえるでしょう。（李 銀眞^{イ ウンジン}）



写真2 西堂の礎石（北西から）